雑誌『詩』の試み

由井志津子

一

雑誌『詩』は、中国で最初に出版された新詩の専門雑誌である。その発刊が計画されたのは、初期白話詩の一時の隆盛が過ぎた時期であった。

中国の白話詩は、胡適がアメリカ留学中の一九一六年に、日常使う言語（すなわち白話）を用いて実験的に詩を書いたのが、その始まりと言えるだろう。文語定型詩の伝統を打ち破ろうという胡適の試みは、彼をよく知る友人達の間でも、すんなり受け入れられるものではなかったが、文学革命、五四新文化運動を経て近代文学が生まれ育っていく中国の中で、多くの知識青年が、胡適の実験に影響され、白話詩を書きはじめた。(1) それらの詩は、それまでの文語定型詩（旧詩）に対して新詩と呼ばれ、新文化雑誌や新聞の副刊などに掲載されるようになった。(2) 反対派は根強く存在したが、日常的な言葉で詩を書くことの妥当性は、次第に認められていった。

しかし、それで新詩の地位が確立したわけではなかった。五四の退潮が始まる一九二一年ごろから、新詩は沈滞期を迎える。(3)『詩』の発刊は、ちょうどそんな時期であった。

『詩』発刊までの経緯を当事者達の回想を手がかりにふり返ってみると、次のようになる。(4)

一九二一年夏、朱自清、葉聖陶、劉延陵の三人は、上海中国公学の国語の教師の同僚として知り合った。彼らは、三人とも文学研究会の会員で、それぞれに新詩の創作経験も持っており、新詩に強い関心を抱いていた。国語の教師という職業のせいもあって彼らは毎日のように文学について語り合い、そのうちに新詩の専門雑誌が世にないことに思い至る。

当時の文学界は、文学研究会が成立し、創造社が創造社叢書の刊行を始めた時期であり、[5] 新しい文学団体や文学の雑誌が次々に作られてゆく時代の萌芽が見られる時期であった。そんな中で、朱、葉、劉が、自分達の手で新詩の専門雑誌を作ろう、という話をしたのが、九月のことであった。それからすぐに中華書局に連絡をとり、編集部の新書担当主任の左舜生と具体的な相談をする。その結果翌二二年一月一日に創刊号を出し、その後は毎月一日発行の月刊誌とすること、編集は朱、劉、葉らが行い、印刷と発行に関しては中華書局が責任を負うことが決められた。

そして、十月中旬、上海『時事新報』の副刊『学燈』に、「『詩』の出版の予告」という広告が載せられた。それは、次のような、詩の形をしたものだった。[6]

旧詩の骸骨は墓の中にほうりこまれた。
生まれてから三年になる新詩は、まだ話をすることができない。

しかし、人々を導く力を秘めていることでは、誰がこの愛らしい赤ん坊に及ぶだろう。
人生を慰める使命を帯びていることでは、誰がこの赤ん坊の美しさにかなうだろう。

私達は『詩』という名前の小さな楽園を作って彼の養育の場にしよう。
彼を愛する人々よ、はやく、できるだけたくさん、この子にお菓子をあげておくれ。

『詩』の発刊に際して、創刊メンバーが自分達の文学主張を表現した「発刊詞」のようなものは何もなかった。言ってみれば、この広告の詩（と呼べるかわからないが）が、唯一の方針の発表となっている。つまり、彼らは、この雑誌を自分達の作品の発表の場としてではなく、不特定多数の人々がその作品を発表できる投稿雑誌という開かれた場として存在させようとしたのだ。彼らはさらに十日後、『学燈』に新しい広告を載せ、『詩』の内容を

①詩　②訳詩　③詩論　④詩人伝　⑤詩評　⑥詩壇消息　⑦通信

とすることを発表している。

発案からここまで一ヶ月ばかり、話は非常に順調に進んだと言えよう。『詩』創刊の前年、左舜生は、田漢から創造社の機関誌の発行に関して協力を依頼されたが、それに対してはあまり積極的ではなかった。[7] 左舜生が新詩の創作の経験を持ち、新詩に対して理解があることを考えあわせても、この『詩』の発刊計画の順調さは注目に値する。時代が、その出現を待ち望んでいたようにさえ感じられる。

創刊時には、前述の三人のほかに、新たに兪平伯が編集メンバーに加わっていた。[8] 兪平伯も文学研究会の会員であり、一九一八年から新詩を発表し始め、一九二二年三月には、胡適の『嘗試集』（一九二〇）、郭沫若の『女神』に続いて、中国で三冊めの新詩の個人詩集である『冬夜』を出版している。新詩の創作においては、他の三人よりも先輩格といえるだろう。兪平伯は、北京大学で新潮社の社員であったころから葉聖陶と文通を始めており、また一九二〇年夏から半年間は、杭州第一師範で朱自清の同僚であった。そのようなつながりから、当時杭州でアメリカ留学のための準備をしていた兪平伯も『詩』の創刊に参加したのだろう。

二

発刊計画は順調に進んだが、実際の発行状況はあまり順調とは言えなかった。二三年五月に停刊するまでの総七期の発行年月日は、以下の通りである。

一巻一号　一九二二年一月　一日
二号　二月二〇日
三号　五月
四号　七月
五号　十月
二巻一号　一九二三年四月
二号　五月

一巻一号から三号までは、投稿先の住所が明示されていなかったこともあってか、(9) この期間、『詩』に作品を発表したのは、編集者と既に何らかのつながりのあった文学研究会と晨光文学社のメンバーがほとんどであった。文学研究会については、編集者が四人共そのメンバーであったことから、そのつながり深さは言うまでもない。文学研究会の会員で『詩』に作品を発表した詩人には、編集の四人をはじめとして、劉半農、郭紹虞、鄭振鐸、徐玉諾、王統照などがいる。晨光文学社は、一九二一年に発足した杭州第一師範の学生のグループで、新詩や小説などの創作活動を行っており、発足当時から朱自清、葉聖陶の指導を受けていた。『詩』に作品を発表した詩人には、汪静之、潘漠華、馮雪峰、程憬、張維祺、陳昌標などがいる。

一巻四号から、『詩』は、文学研究会の定期刊行物になる。[10] それは、編集者がすべて文学研究会の会員であるという理由からで、投稿雑誌の原則はあくまで堅持し、読者からの投稿は大歓迎であることを編集後記などで重ねて強調している。実際、この号からは、目次に新しい名前も増えはじめたが、何植三、馮文炳らの作品がある程度の水準を持ち、独自の作風が見られる以外は、新しい作者の作品の中には、目をひくものが少ない。[11] このころから、晨光文学社の詩人達の作品もぐっと少なくなり、[12] 結果として『詩』は、文学研究会中心の雑誌となっていった。

それでは『詩』には、どのような詩が発表されていたのだろうか。

内容の面で画期的なのは、恋愛詩であろう。『詩』は当時まだタブー視されていた向きもある恋愛の詩を、積極的に掲載していった。晨光文学社の、二十歳前後の若い世代の人々は、その若々しい感受性を発揮して、感傷的抒情的な恋愛詩を『詩』誌上に発表した。晨光文学社の中でも、汪静之、潘漠華、馮雪峰の三人は、新詩に対する関心が特に強く、彼らに応修人を加えた四人は、湖畔詩社というグループを作り、二三年四月には、最初の詩集『湖畔』を出版している。

湖畔詩社の詩人達の中でも、最も成果のある[13]汪静之は、一巻二号に「謝絶」を発表し、恋愛のよろこびを美しく歌いあげている。

伊的情絲和我的　　彼女と私の心の糸を
織成快楽的幕了　　合わせて快楽の幕を織った
把他做遮欄　　それをついたてにして
謝絶人間的苦悩　　世の中の苦しみをさえぎろう

しかし、『詩』には、〝世の中の苦しみ〟に直面した詩も、数多く見られる。徐玉諾は、『詩』に最も多く作品を発表

した詩人だが、彼は、現実生活の暗い面をまっすぐに見つめ、それを写実的に詩に描いている。『詩』二巻一号に発表された徐玉諾の「苦悶」という詩は、次のような詩である。

苦悶随着日子増加起来了。　苦しみは日ごとに増えてきて
躺下鬱在心里　横になれば心にたまり
坐起浮在脳上　起きあがれば頭に浮かぶ
只有走着彷彿印在地下　歩いているときだけは地面に刻まれてゆくようだ

当時、軍閥が割拠し、社会が混乱している中で、五四運動後の挫折感と喪失感を抱えた知識人の心には、ある種の行き場のない苦悩が、共通した感情として存在していた。そういった自己の心の苦悶を反映した作品が、『詩』のひとつの特徴となっており、文学研究会の詩人達が、このような作品を多く書いている。実際の暮らしの中での困難、また農民や人力車夫などの下層の労働者の形象など、社会全般にわたる矛盾に題材を求めた詩の中にも、彼らの苦悶が反映されている。

三

『詩』は、新詩の発表を主体とする雑誌であるが、毎号、外国詩の紹介や、詩に関する論文が発表されており、それらの文章は、ほとんど文学研究会の会員によって書かれている。

詩に関する論文は、大体毎号一篇ずつ掲載されているが、中でも重要と思われるのは、兪平伯の「詩底進化的還原論」（一巻一号）と、葉聖陶の「詩的泉源」である。「詩底進化的還原論」は長大な論文であるが、その中心をなすのは、〝詩は民衆のものである〟という考え方である。その中で、彼は、現在の文学が貴族的なもの（一部の特殊な人々に占有

されている状態）であることを認め、それを打ち破って平民的な民衆の文学を確立しなければならない、と主張している。詩について言えば、詩とは本来民衆のものであり、白話で詩を書くということは、詩が一歩民衆に近づいたということで、それは進歩であり、また、本来の姿に還るという意味で回帰（原文は還原）である、という考え方である。そして、その〝進化的還原〟を進めるために、詩の題材を民衆の中に求め、民衆の風格を持った詩を作るべきだ、と主張する。このような「民衆文学」は、兪平伯ひとりの主張ではなく、文学研究会の中でも、重要な研究テーマのひとつとなっていた。『文学旬刊』紙上でも討論がなされており、[14] 兪平伯をはじめ、朱自清、葉聖陶らが、それぞれ自分の意見を発表している。各自「民衆」の定義に曖昧さが残り、「民衆文学」の規定にもずれが見られて、それ自体はあまりかみ合った議論とは言えない向きもあった。しかし、そこに共通していたのは、「文学は一部の人々だけのものであってはならない」という考え方であった。

「詩的泉源」で述べられているのは、「生活」の充実である。葉聖陶は、詩とは「生活」を泉として、それが自然に流露したものである、と考える。それゆえ、現実生活（精神的な内面生活も含めて）の充実なしに書かれた詩は形の上だけのものでしかなく、すぐれた詩は生活の充実から生まれるものだ、と主張する。

『詩』に掲載されている詩は、恋愛から貧困まで、非常な広範囲に題材を求めている。それは、一方では「民衆文学」の主張の実践であろう。しかし、同時に彼らの生きざまの反映でもあった。さまざまな生があり、さまざまな詩が生まれる。前章で引用した「謝絶」と「苦悶」の二首の詩は、ひとつは恋愛のよろこびを歌い、ひとつは生きることの苦悶を歌い、その描いている内容は、明と暗と、対称的な詩のようにも見えるが、どちらも内省的、観念的な目で自らの「生活」を表出した詩と言える。また、下層労働者の形象も、一時の物珍らしさから詩にしたのではなく、彼らに対する深い同情と、自分自身の感じる社会の矛盾への苦悩という自己の「生活」がその根本にあるのだ。

また、外国詩の紹介にも、「民衆文学」の考え方が反映されている。『詩』では、訳詩、外国の詩人の伝記や外国の詩壇の紹介という形で、毎号外国詩の紹介が行われた。イェーツら、アイルランドの被抑圧民族の詩や、ホイットマン、タゴール、フランスの象徴詩、日本の俳句や短歌など、その当時の中国の文学界で比較的よく知られていたものだけでなく、民衆の生活に着眼して、ウクライナ地方の、今では使われなくなった方言で書かれた民歌体の詩や、ユーゴスラビアの民間に伝わる恋歌、日本の民謡、都都逸、端唄、童謡なども翻訳して紹介された。

そして、何よりも、『詩』を同人雑誌ではなく、投稿雑誌にした発想が、少数者による文学の占有とは正反対の考え方であったと言えるだろう。

四

詩の形式の面に目を向けると、まず『詩』には小詩が非常に多く掲載されているのが目につく。

小詩とは、二、三行から七、八行の極めて短い詩で、中国では、一九二二年から二四年ぐらいまでの間に大流行した。当時の小詩の流行の背景には、大きく分けて二つの流れがあった。ひとつは、タゴールの影響を受けた理知的な小詩であり、この派の代表的な作家として、宗白華と謝冰心の二人が挙げられる。[15] もうひとつの流れは、日本の短歌・俳句の影響を受けたもので、周作人が一九二一年に日本の短歌と俳句を紹介する文章[16]を書いたのがきっかけとなって流行したものである。

『詩』の出版されていた時期は、ちょうど小詩の流行の時期と重なっており、『詩』に発表された詩の総数の半分までが小詩体の詩で占められている。数は多いが、玉石混淆で、中にはまるで格言のような安易なものもある。そうした中で、小詩の創作に対する兪平伯と朱自清の姿勢には、新詩の可能性とあるべき姿を常に追求する姿勢が見られる。

兪平伯は、一巻一号に「憶遊雑詩」と題する十四首の小詩の連作を発表している。それは、日本の俳句と中国の歌謡にヒントを得たもので、二、三行のごく限られた中に、旅の風景をうたい、風景をうたう中に感情を表現しようとした、小詩の新しい可能性を追求したものであった。その中の、陸游の旧居である快閣で作った詩は、次のような詩である。[17]

雨灑白藤、朗朗如玉、　　雨が藤の花にふりそそぎ、きらきらと玉のよう
放翁在麼？同来躑躅！　　放翁はいるかい？　一緒にぶらぶらしよう！

拙ない訳で雰囲気がうまく表せないが、軽快なリズムの中に、旅の一過性の感興が表現されていて、独特の雰囲気を持つ作品である。朱自清は、この「憶遊雑詩」に触発されて、同じ号に、自分も二、三行の小詩を発表し、その序の中で、改めて小詩の可能性を述べ、小詩の成功には、短い中に〝集中すること――詩境の面でも音節の面でも――〟が大切であると説いている。

しかし、安易な小詩が流行しだすと、朱自清の態度はすこし変わってくる。朱自清は、一巻四号に「短詩与長詩」という文章を発表し、現在の詩壇に粗雑な小詩が氾濫していることを嘆き、小詩の質の向上を望むと共に、小詩では表現しきれない、豊かな、或いは屈折の多い情感を盛りこんだ長詩を書くことをも、合わせて提唱する。積極的な試みの姿勢と言えるだろう。

形式の面で、新詩の可能性を追求したもうひとつの例として、散文詩がある。

中国には、もともと散文詩の概念がなく、その名がはじめて用いられたのは、一九一八年のことであり、この年の『新青年』の四巻五期に、劉半農が翻訳した、詩の紹介の文の中に、この言葉が見られる。[18] その後、『新青年』をはじめとして、雑誌、新聞の副刊などに、外国の散文詩が紹介され、また、劉半農自身、散文詩の創作を行って、発表したり

もした。しかし、もともと中国にない概念であり、その定義については、詩人の間でも混乱が見られ、『文学旬刊』紙上で討論が行われた。[19] 散文詩といっても、言葉の自然なリズムを生かした朗詠できるものでなければならない、そうでなければ詩とは言えない、という主張がある一方で、形式上は散文と全く同じような散文詩も存在するはずだ、と反駁したのが鄭振鐸であった。そして、鄭振鐸は、『詩』一巻三号に、五首の散文詩を発表する。その中の「痛苦」という詩を訳出してみる。

苦しみは永遠だ

それはつる草のように、人の心にはびこり、野火に焼き尽くされても、春風がちょっと吹きさえすれば蘇る。

それはエジプトのピラミッドのようで、子供がそこにあるのを見、大人も同じようにそれを見る。白髪の老人も、昔どおりにあるのを見る。

だから孤独な人の悲しみと子を喪った母の涙は、いつまでも死なず、いつまでも涸れることはない。

よろこびは一時（いっとき）に過ぎない。

それは雨の夜空の雷光のようだ。道に迷った旅人はずっと待っている、それなのにやってくるのは一瞬、ただ一瞬だけ、そして飛び去ってしまう。

それはまた渓流が大きな石にぶつかってできる白いあわのよう、流れが静まれば消えてしまう。

それはただ、希望と探求と回憶の中にだけ存在する。

形式上は散文と変わりないが、その比喩表現によって独特のイメージの世界を作りあげており、散文とは一線を画している。前述の主張を実践に移した作品であり、作品自体の優劣は別にして、新詩の可能性を広げたという意味で有意義な作品だと言うことができる。

『詩』誌上には、鄭振鐸以外に、劉延陵や兪平伯、徐玉諾らに散文詩が見られる。兪平伯の「『憶』序」（二巻二号）は、自分の詩集の序として書いたもので、詩的要素は薄い。しかし、劉延陵の「銅像底冷静」（一巻五号）は情感あふれた作品であり、徐玉諾の散文詩は、自己の内面を赤裸裸に表出した迫力のある作品で、どちらも詩としての水準に達したものとなっている。紙面の都合で全文は引用できないので、「銅像底冷静」のはじめの一章を訳出してみる。

鉄の欄干の外の柏樹は、緑に色づき、そして青青と繁り、またすこし色あせ、幾度も移り変わってきた。
四尺余りの石柱の上に立ち、一心に人間（じんかん）に耳を傾ける君。聞こえてくる風の知らせや、世の中の歌と涙は、必らず
君の心に深く浅く、たくさんの痕跡（あと）を残していっただろう。
どうしてこんなに冷たいのだろう、死のように。

また、徐玉諾の散文詩の中から「走路」（一巻四号）を訳出する。

陽光の失なわれた、うっそうとした榕樹におおわれた、暗くさびしい通りを、私はひとりぼっちで歩く、
私は一歩一歩あるく、私の心はある強烈な信念に導かれている。
誰にわかるというのだろう――このわけもなくでたらめな思考！
恋人にばったり出会えたらと思う、通りの曲がり角の暗がりで、彼女は大胆に心をふるわせて言う、
あれは玉諾じゃない？
私の恋人は誰だ？――どんな姿、情緒、心根……それは一体何だ……？
私にはわからない――
まだ概念すらないのだ。
しかし私は……私は気ちがいのようにあせって、通りで彼女と出会うことを考えている。

五

このように、『詩』は、すこしずつ新詩の領域を広げていった。投稿も次第に集まるようになり、新しい詩人が育ってゆく可能性も十分にあった。しかし、一九二三年五月、『詩』は突然停刊になる。

『詩』の編集者の四人が、一九二二年の秋にどこに居たのか見てみると、兪平伯はニューヨーク、朱自清は台州、葉聖陶は蘇州、劉延陵は杭州と、みなばらばらである。それゆえ、『詩』の編集のほとんどは、葉聖陶と劉延陵の手によって行なわれた。[20] さらに、それぞれが、教育、編集、創作、と自分の仕事を持っており、『詩』の編集のためにさくことのできる時間は限られていた。編集作業が滞るのも、やむを得ないことだったかも知れない。[21]

一巻五号から半年を経て、ようやく刊行された二巻一号の編集後記には、多忙のため編集事務が遅れてしまったこと、次号の原稿はもうそろっているので次号は一ヶ月後に出版すること、が述べられている。確かに一ヶ月後、二巻二号が発行されたが、それが『詩』の最後の号になった。二巻二号の編集後記は、載せきれないほどの原稿が集まっていることを喜び、改めて投稿の宛先を掲げている。編集者自身も、これが最後の号になるとは思っていなかったのだろう。

編集者の多忙も、確かに停刊のひとつの要因ではあろう。しかし、現実に彼らは多忙の中、『詩』を二巻二号まで続けてきたのだ。『詩』に集まった詩人達――文学研究会の詩人達は、既に新詩への情熱を失いはじめていたのではないか。それが、停刊の、より本質的な理由ではないかと、私は考える。

『詩』に集まった詩人達の中で、一生新詩を書き続けた人は、ほとんどいない。編集の四人を見ても、葉聖陶、朱自清、兪平伯の三人は、教育、編集、散文や小説の創作、古典研究へと向かい、劉延陵は、一九二七年にシンガポールに

去った。朱自清は、一九三一年に、自分が新詩を書いていた時代を回想し、その理由について、次のように述べている。[22]

それは時代のせいだ！　十年前、ちょうど五四運動のころ、みなの生気に満ちあふれたはつらつとした精神が、年若い学生である私にせまってきた。それで、私も他人の足跡をたどって、自然やら人生やらについて、ちょっと口にだしてみたのだ。

この朱自清のことばをそのまま受けとるわけにはいかないが、『詩』の詩人達においては、内から湧き上る切実な衝動といったものよりも、むしろ白話詩の存在意義の主張、あるいは〝あるべき白話詩〟のイメージが先行していたことは認めなければならない。

もちろん、彼らの内的衝動――心の底から湧きあがる詩情――をすべて否定するわけではない。実際、徐玉諾の作品の多くは、内的衝動を強く感じさせる詩である。しかし、文学研究会の詩人達の全体的な傾向として、スタイルが先にあって、それに基いて、そのあとに創作が来る傾向があった。そのような姿勢は、あくまで新詩創作の〝試み〟であっても、詩のあり方としては限界があるものではないか。彼らが考察したのは、〝中国の詩〟であって、〝自分の詩〟ではなかったのだ。

その意味で、彼らは「詩は書くものだ、作るものではない」[23]といった郭沫若に比して「才」において劣り、また当時の白話詩にあきたらず、口語格律詩などを試みた聞一多らに比して「詩的なもの（美）」への執着において一歩あるいは数歩を譲ったかも知れない。しかし、そのような彼らによる雑誌だったからこそ、『詩』は、ごく普通の、とりたてて才能はなくとも若い生を真摯に生きている青年達を動かし、新詩の創作へと向かわせたのだ。そして、それによって、新詩の基礎を築き、広げたのである。

注

(1) 胡適は、自分の文学革命の主張を、中国人留学生の数人の友人に打ちあけ、論争を行っている。彼らの反応は、白話文学には賛同する者もいたが、白話で詩を作ることについては否定的であった。また、胡適が初期の白話詩人達に、大きな影響力を持っていたことは、朱自清『中国新文学大系、詩集』の導言の中に

(胡適的)「談新詩」差不多成為詩的創造和批評的金科玉律了。

という記述があることからもわかる。

(2) 『新青年』には一九一八年二月から新詩が掲載されている。また一九一八年十二月に創刊された『毎週評論』や一九年創刊の『新潮』『少年中国』なども新詩の作品が載せられている。新聞の副刊としては、『時事新報』副刊の『学燈』や『晨報副刊』などが挙げられる。

(3) 周作人は、一九二一年五月に書いた文章の中で、詩の改革はまだ途中で、白話詩の真の価値が発揮されていないのに、あたかも新詩の地位が確立されたように思われて、新詩壇がそのまま沈滞してゆくことを愁い、新詩専門の研究会や雑誌が出現するべきだと述べている。(「新詩」『談虎集』一九八七年九月上海書店影印出版)

(4) 『詩』についての回想は、以下のようなものがある。朱自清「選詩雑記」一九三五年。俞平伯「五四憶往——談『詩』雑誌」一九五九年。劉延陵「『詩』月刊影印本序」一九八五年。どれも短く、簡単なものである。中でも俞平伯の回想は、『詩』の総発行号数など、基本的な部分での記憶違いが目立つ。また、今回見ることのできた唯一の『詩』についてのまとまった文章として、楽斉「新文学史上的第一个詩刊——『詩』月刊」(『新文学史料』一九八二年四期)がある。

(5) 一九二一年八月に創造社叢書第一種として郭沫若の『女神』が出版されている。

(6) 『学燈』は未見。この詩は、『詩』の一巻四号に「去年の秋、この雑誌の創刊前に『学燈』に掲載した投稿募集の詩」として載せられている。十月、というのは(4)の楽斉の文章による。

(7) 郭沫若「創造十年」の中に、郭が左舜生にはじめて会った時に、左が田漢から出版社の件を頼まれていくつかあたったが、だめだったことを郭に話した、という話がある。左舜生（一八九三――一九六九）は、一九一九年に少年中国学会に参加、『少年中国』月刊に「願意」「黄昏」「南京」などの新詩を発表していた。一九二〇年当時は、既に中華書局編訳所の新書主任になっていたこともあり、左が創造社の機関誌にあまり積極的でなかったことがわかる。

(8) 『詩』の編集は、「中国新詩社」となっており、具体的な人名を『詩』誌上に見ることはできない。しかし（4）の回想などから、葉聖陶、劉延陵、朱自清、俞平伯の四人が編集を担当した、と考えるのが妥当だと思われる。

(9) 一巻三号の表紙裏に「投稿諸君鑒」という記事があり、それまで投稿先の住所を明示しなかったことを謝罪し、投稿先として、葉聖陶と劉延陵の住所を示している。

(10) 『中国新文学大系、詩集』の「編詩用詩集及期刊目録」には、『詩』は一巻五期から文学研究会の定期刊行物になった、とある。確かに、表紙に「文学研究会定期刊物之一」という文字が書かれるようになったのは一巻五号からであるが、一巻四号に文学研究会の定期刊行物にする旨宣言があるのと、『文学研究会資料』（河南人民出版社、一九八五）に『詩』一巻四号は文学研究会出版、とあることから、このように判断した。

(11) 何植三は一九二九年に亜東図書館から詩集「農家的草紫」を出しており、農民の形象の描写がすぐれている。馮文炳は二巻一号、二号にあわせて四首を発表したのみであるが、独特の感覚的な世界を作りあげている。

(12) 晨光文学社の社員の『詩』誌上における詩の発表数は、以下の通りである。

一巻一号　14首
二号　12首
三号　12首
四号　5首
五号　1首

二巻一号　2首
二号　4首

このように、晨光文学社の社員の詩が急激に減ったことについては、さらに考察を加える必要があるだろうが、今回は事実を指摘するに留めておく。

(13) 汪静之は、一九二二年八月に、個人詩集『蕙的風』を亜東図書館から出版している。

(14) 討論の経過は以下の通り。
朱自清「民衆文学談」一九二一年十月十日
俞平伯「与佩弦討論〝民衆文学〟」一九二一年十一月十二日
俞平伯、許昂諾、葉聖陶、朱自清「民衆文学的討論」一九二二年一月二十一日
俞平伯「更正」一九二二年二月一日。
当時、文学研究会では、さまざまな文学上の問題をとりあげ、『文学旬刊』紙上で討論を行い、考察を加えていた。ただ、討論と言っても、各自が自分の意見を発表しあうだけもので、結論を導くためのものではなかった。

(15) 宗白華「流雲」一九二三年。
謝冰心「繁星」一九二一年、「春水」一九二二年。

(16) 「日本的詩歌」『小説月報』十二巻五号

(17) この詩の序に「快閣、宋陸游之旧居」とある。実際の快閣がそうであるかについては未確認。

(18) 孫玉石「『野草』与中国現代散文詩」(『北京大学紀念魯迅百年誕辰論文集』一九八二年四月北京大学出版社所収)などによる。

(19) 『文学旬刊』に発表された、散文詩に関する主な論文には、以下のようなものがある。
劉延陵「論散文詩」一九二一年十二月二一日

鄭振鐸「論散文詩」一九二二年一月一日

王平陵「読了『論散文詩』以後」、敷徳・鄭振鐸「通訊」一九二二年一月十一日

(20) (1)に挙げた回想の文章と、投稿先がこの二人の住所になっていたことから判断した。

(21) はじめは月刊誌の予定であったが、一巻五号の編集後記で、多忙を理由に、一年にだいたい8号ぐらい、と訂正している。

(22) 「論無話可説」一九三一年三月、『你我』所収。

(23) 郭沫若が一九二〇年一月十八日に宗白華にあてた手紙の中に「詩不是『做』出来的、只是『写』出来的」という記述が見られる。(『三葉集』一九八二年六月上海書店影印出版)

〔補注〕 丸山昇教授のご教示によると、一九二七年に蕭軍が吉林で徐玉諾に会い、魯迅の『野草』をすすめられた、という興味ある記述があり(「江城詩話」『蕭軍近作』81・6四川人民出版社138～147頁)、また蕭軍にとって徐玉諾の印象は強く、のちに魯迅と文通を始めた時、最初に魯迅に彼のことを尋ねている(詳しくは『魯迅給蕭軍蕭紅信簡注釈録』81・6黒竜江人民出版社、における魯迅からの第一信〔34・10・9〕についての蕭軍の注釈参照、上記「江城詩話」と重なる記述がある)という。徐玉諾は、当時、一定の影響力を持った詩人であり、その赤裸裸な苦しみの表出には賛否両論があった。当時の新詩のあり方をさぐる意味で重要な存在であると思われ、機会があれば、稿を改めて論じてみたい。